



陶芸は楽しい

私たちは、日常の生活の中で、ご飯茶碗や湯飲みなどの様々な食器(やきもの)を使っています。そのなかには、お気に入りです。またそれらのやきものをじっくり眺めていると、自分でそのようなやきものを作ってみたく思うこともあるでしょう。

やきものには、土器、陶器、炆器、磁器があります。磁器は、地が白く透明性で、吸水性はなく、質は硬い。和食器にはこの磁器の焼き物が多く、瀬戸焼や九谷焼が有名です。

炆器は、素地に吸水性はないが不透明で、備前焼が有名です。陶器は、素地に吸水性があり、不透明です。唐津焼や萩焼が有名ですが、関東にも益子焼や笠間焼などの陶芸の町があります。これらの町では陶器作りを容易に経験することもできて、陶芸が身近なものだと実感することができます。

楽庵でも陶芸を活動の1つとして行っています。

陶芸は①形をつくる。②素焼き。③釉薬をかける。④本焼き。と4ステップの工程からなります。

①形をつくる工程では、手轆轤を使い、紐作りの技法(轆轤がない縄文時代、弥生時代からの手法)で作るのが容易です。この技法により、ぐい呑み、湯飲み、マグカップ、抹茶

茶茶碗、花瓶等さまざまな形を作ることができます。

②素焼きは、形づくったものを、800℃前後で焼いて、釉薬が吸着し易くします。

③釉薬をかける。さまざまな釉薬が市販されていますが、自分で調合して自分なりの釉薬を作るのも楽しいものです。釉薬の基本原料として、長石、珪石、カオリン、石灰、土灰などがあり、これらを調合し、亜鉛華、酸化鉄、珪酸鉄、酸化銅、酸化コバルトなどの金属類を添加して、さまざまな色合いの釉薬を作ります。

④素焼きしたものに、釉薬をかけ施して、

1250~1300℃で本焼きをします。意図した作品ができたときはうれいものです。陶芸は友人へのプレゼントとしても喜ばれますので自身の有能感を高めることができます。

湘南四季の花

平日の茅ヶ崎里山公園。聞こえるのは風の音と鳥の声。静かななかでロウバイの若い木が花を咲かせている。

(茅ヶ崎市芹沢)



高次脳機能障害研修会 i 江の島

神奈川県リハビリテーション支援センター主催の高次脳機能障害研修会が2010年12月19日、江の島のかながわ女性センターで開催されました。湘南東部地域の支援体制を強化する目的で、調査研究啓発を行う事業を行ってきた神奈川県リハビリテーション支援センターが企画運営した研修です。当日は医師や地域の職業センター相談員、作業療法士の講演があ



り、80名余りの人たちが熱心に聴講しました。最初に講演されたのは茅ヶ崎徳洲会総合病院院長の

合病院院長の「高次脳機能障害の医学的理解」という演題で、fMRIを使った急性期から回復期の回復過程に関する研究についてお話しくださいました。今後のリハビリテーションの治療法として薬物療法、電磁気刺激法、強化理学療法、認知療法、電気刺激法、再生医療の話をわかりやすく簡潔に話してくださいました。高次脳機能障害の記憶や注意や対人技能や遂行障害や感情のコントロールに関して医学的側面で症状を精査し忍耐強く治療をしてもらえる病院や医師がいることを心強く思いました。

徳洲会は湘南東部地域の基幹病院として辻堂に新病院を新設する予定があり、市民の期待も大きく、より新しい治療技術が臨床に応用されると思います。

さらに、高次脳機能障害への生活の中での支援としては、①情報量のコントロールとして聴覚や視覚情報の制限、②構造化、③作業の分割、④ストレスや過労をなくす、⑤代償手段の導入、⑥失敗のない学習、の紹介がありました。地域では、医学的なりハビリテーションを終えた人が障害を受け止めて生活を組み立てていくのが課題で、日中の活動の内容が重要であると認識しました。地域活動支援センターの地域での機能をさらに充実させていきたいと痛感しました。研鑽を深めた一日でした。

楽楽農園みかん狩り

茅ヶ崎市に住んでいた呉慎次郎・衣久子さんご夫妻は10年前、西伊豆の沼津市井田に移り住んで地域の方たちに信頼され、田んぼで米を作り、みかん園を運営し、障碍のある人たちにみかん狩りを無料で解放しています。

11月27日、総勢17名で楽楽農園にみかん狩りに行きました。美しい駿河湾をはさんで富士山が浮かぶなかでみかん狩りを楽しみました。

また1月23日には、村おこしのイベントとして田んぼにグラランドピアノを持ち込み「菜の花まつり 田園コンサート」が開催されました。村人総出の漁師鍋は圧巻でした。次代を担うこども



の演奏が村に響き多くの方々が井田の良さを絶賛し大きな拍手が鳴り響きました。

11月30日、東京大学の安田講堂2階にコミュニケーションサポートルームが開設されました。学習成績がよく、最高学府にいる集団の中で適応が難しい発達障害の方が相談する窓口です。開設記念の講演会では昭和大学病院の精神科医加藤進昌先生のほかに、当事者でもある片岡聡さんも講演しました。片岡さんは



4月21日のNHKクローズアップ現代に出演し、その得意な才能が放映されました。片岡さんは博士号を持っていますが、幼少時から感覚の過敏さや認知の偏りに苦労してきました。

一般的に発達障害という知的な遅れがあると思いがちですが、知的障害のあるなしに拘わらず対人相互的反応の障害があることは案外知られていません。

また、発達障害は2次障害を併存することも多く、学習成績が優秀であると、本人の持っている過敏さや生きづらさに周囲が気づかないで、成人になってから精神病として重篤に診断されることもあります。10月の楽庵での学習会で、片岡さん自らのエピソードを交えながら、専門である薬学的な視点をふまえて、この2次障害に対する今後のケアの問題を話してくださいました。

現在、児童精神科医は統合失調症や躁鬱病と発達障害の二次障害の鑑別診断基準に見直しを図っていると聞きます。

編集後記

乳幼児期から発達障害の偏りを配慮する取り組みが保健医療教育分野ですすめられていくことを希望します。片岡さんのような優秀な研究者が本来の力を発揮できるように社会全体で取り組む必要があります。

東大の講演会では、東大が率先してゆとりのある教育の先鞭にたち、発達障害を受け入れたいと提言されました。

自然や社会や人をよく観察していくと、キーワードは多様性と共生かなと感じます。どんな辛い悲しいことも愛と感謝で乗り切っているメンバーには、明日があると気づきます。茅ヶ崎海岸の浜ボウフウには弘法麦が共生して、お互いに種の保存をしてきたように、多様性を大事にする社会のモデルは草花の植生にあると思いました。尊厳ある出会いに感謝しています。

初めての海外旅行が ロシアの世界遺産の旅なんて

Simo Lennon

意識不明の風邪の後遺症による高次脳機能障害をみちづれに20年、ついにロシア観光を実現しました。



おやじが母と妹に「Lennon だけは置いてゆけ！」と言ったので、隠れて横浜でパスポートをとりました。ロシアは秘密警察KGBの国怖い国だと考えていました

が、実は若い女性は美しく中年のおばさんはころころ太って日本と同じでした。

(* ^ ^ *)

町の中に美術館が多くて人種も言語も様々でした。エルミタージュ美術館は、ばかでかかった。

日本は猛暑でしたが、ロシアは涼しく、ケーキもチーズもおいしかったし、携帯電話はスマートフォン先端技術のものでした。

帝国の名残のある庭園の美しい街でした。はじめての海外を観光してロシアの醍醐味を満喫しました。まさにビートルズの「イマジン」の世界でした。

Imagine all the people living for today

旅により今を平和に一つに共有できました。

今と昔がある不思議な国でした。



この人
NPO ゆい 荒井 三七雄さん



海浜植物の里親制度の実現に向けて精励される荒井さんのご自宅を訪問した。楽庵は、荒井さんとは日頃から親しく交流させて頂いている。二階には発芽実験をしているコンテナがたくさんあり、温度や水や土壌などを考慮して全国の種の性状を比べていた。今迄は事業家として活躍されてきた荒井さんに海浜植物の里親になるうとするきっかけをお聞きした。荒井さんは昭和20年代茅ヶ崎に育ち、辻堂海浜公園あたりの砂丘で毎日遊ん

でいたようだ。小学校のころ朝鮮戦争があり、その後、明治時代から辻堂演習場と呼ばれていた今の辻堂団地がある砂浜には米軍の水陸両用のタンクやパラシュート部隊が演習をしていたらしい。茅ヶ崎小学校から帰ると毎日のように一目散に砂浜にでかけて遊んでいた。時には名女優山本富士子が砂浜で手紙を燃やすシーンに出会ったり、SF映画のエキストラにもなったことがあるらしい。少年時代の荒井さんが見聞きした茅ヶ崎海岸はおそらく植物よりも時代を反映した衝撃的な出来事で彩られていたに違いない。浜見山には道路もなく砂山で海を見下ろす格好の場所だった頃だ。叔母さんが時折り作るハマボウフウのてんぷらを食べたこともあったとのこと。

歴史を辿ると、片瀬から柳島に至る海岸は、江戸時代は砲術訓練場で、明治時代は海軍省の演習地だったらしい。江戸時代、砲術訓練場の幕府責任者の佐々木卯之助が、その立ち入り禁止の海岸を農民が耕作するのを黙認し、青ヶ島に流刑になり海前禅寺に供養されたことも話してくださった。

とにかく荒井さんは歴史や文化労働に至るまで話題が豊富でおもしろい。海浜植物の里親になろうとした動機は「自分のちいさいころの原風景を蘇らせた」とい、ハマボウフウの自生する砂山やひばり鳴く砂丘を想像しての気持ちのようだ。海浜植物を栽培する基盤は生物多様性条約新戦略計画にある。「単に自然を守るというだけでなく、今残された多様性を保全していく取組みこそが気候変動への適応をはじめわたしたちの社会の安全や豊かな社会の実現につながる」この提言のために自発的に参加し、コミュニティの創生を志したようだ。きずなをしっかりと結べる人を育

成していきたいと目を輝かせて言われた。これまでの実業家としての経験を生かして人を集め登録して情報を共有化するための訓練プログラムまで企画している。壮大なビジョンを持っている荒井さんとの出会い、生物の保護だけではなく大きな社会への働きかけを聞いて感動した。生物の多様性を見つけ、保護活動を盛んにするにはまず楽しく親子で、どういう生き物がどう

いう処に生きていて、どのように生息しているか、まずは観察することが大事であると言われた。こどもが観察をすることを好きになること、楽しむこと、そして植物の名前を覚えるだけではなく、時間があれば分からないことを自分で仕組みを調べ知ることではないかと言われた。環境教育の基本があり、植物だけではなく、人間の多様性も認識することが大切で、そこに荒井さんの強固な信念を感じた。二時間があつというまに過ぎて、荒井少年は発芽実験に戻った。

「ロゴマークはハマボウフウと長い根を写し、生息する砂浜と海を表現したNPOゆいの登録マーク」

